

題字  
大島文雄先生

じんぶん

# 人 文



教養科目「富山大学学」で旧蓮町キャンパスを訪れる学生たち

五福キャンパス人文学部棟前の  
「富山高等學校開校記念碑」

## 総会記念講演

### 旧制富山高等学校と 新制富山大学の発足をめぐって

磯部 祐子・入江 幸二

富山大学人文学部の前身である旧制富山高等学校は、1923（大正12）年に開学されましたが、1925（大正14）年の蓮町における校舎完成を経て、1928（昭和3）年10月に開講式が挙行されました。その時の様子は漢文で記された「富山高等學校開校記念碑」（現在人文学部棟前に移設されている）に鮮やかに描かれています。まずは、碑文を読み解きながら、開学の喜び、創設者の思い、時代の精神に思いを馳せたいと思います。（磯部）

1949（昭和24）年に新制富山大学が発足して70年余りとなりましたが、当初からキャンパスの集中をめぐって議論があり、それは形を変えつつ現在にも影響しているといつてよいでしょう。次いで旧制富山高等学校をはじめとした前身校のあゆみと新制大学発足前後の経緯を中心に、大学の歴史を振り返ってみたいと思います。（入江）

### 富大の教育への感謝と近年の米語

杉森（秋本）典子（29回英文）

追悼 平田純先生 教授 大工原ちなみ

追悼 楠瀬勝先生 同窓会長 米原 寛

第二の故郷 アンナ ドゥーリナ（22回院・人間学）

研究室から／フランス言語文化 教授 中島淑恵

### キーワードは「主体性」

文化人類学研究室40周年シンポジウム報告

穴場 理（30回文化人類学）

研究室から／社会学 教授 伊藤智樹

### 宇野隆夫先生の古稀をお祝いする会

小田木治太郎（2回院日本・東洋文化）

総会、人文の集い報告、新刊案内

第5回 人文学部の歩み 入江幸二

令和2年度総会、第9回人文の集い開催案内

文化人類学コース同窓会へのお誘い

## 富山大学人文学部同窓会

〒930-8555 富山市五福3190

電話：(076) 445-6143

FAX：(076) 445-6142

E-mail：  
alumni1@hmt.u-toyama.ac.jp

# 富大の教育への感謝と近年の米語

カラマズー大学日本語学科長・准教授

杉森（秋本）典子（29回英文）



社会言語学を教えています。

どうして私がこんなに勉強ばかりするようになってしまったのか。それは富大在学中に真剣に勉強しなかったことを深く後悔し、その埋め合わせをせずにはいられなかったからです。

私は人文学部第一回の英文の卒業生で、初めは公立学校の英語教員になりました。二十九歳の時、ロータリー財団奨学金を得てミシガン州立大学、コロンビア大学の大学院修士課程に一年留学。その後職場復帰しましたが九十三年に退職。それ以降は米国在住です。ボストン近郊に住み、子育てをし、日本語を教えながら、大学院で勉強を続けました。ハーバード大学教育大学院では言語習得とバイリンガリズムを専攻し、ボストン大学では社会言語学の論文を書きました。十年前からはミシガン州のカラマズー大学で日本語と

勉強させていたのか。平田先生が英文科のレベルを上げようといかにご尽力になっていたのか、その一端に初めて触れた思いが致しました。

帰国時には平田先生に講義のお礼を言いに行きました。先生は、「僕は授業が下手だね。だからこそ君達には一流の先生方の講義にふれて欲しかった。どうか富山に来てくださいと中央の先生方をお願いして、集中講義に来てもらった」と言われま

後遺症で常に膝が痛くて勉強に集中できず、将来食べていけないかどうかの不安に押し潰されうでした。本当は当時花形だったチョムスキー派の理論言語学をわかるようになりたかったのに、自分には難しすぎると挑戦もせず言語学専攻を諦めてしまったことを悔み続けました。

苦労の末に実現されているとは知りませんでした。日本からの留学生仲間と話して知ったことですが、集中講義がない大学がほとんどみたいです。富山にしながらにして東京大学の先生等の講義を受けられた集中講義は貴重な機会だったはずですが、当時は有り難みもわからず、東京大学の学生と比較されて私達ダメだときっと思われてるよね、などと級友と話し、ただ黙って聞いていました。勿体無いことをしました。在校生の皆さんには、講師の先生方を利用するつもりでどんどん質問してほしいと思います。

平田先生以外にも、一人一人の学生の心に寄り添ってくださった奥原先生、レポートに驚く

ほど多くのコメントを書いてくださったイギリス人講師オストラ先生、厳しい講義で知られた寺津（今西）先生、伊里先生、英語教育について助言をくださった加瀬先生とESS顧問の永田先生など、富大で出会った人文学部内外の先生方への感謝も

米国の大学ではこの十年で拡大し、配慮という観点から、LGBTQへの配慮という観点から、LGBTQの学生に対しては、*he* や *she* を避けて *they* を使うよう推奨されています。例えば「その人は学生です」の意味で「*They are a student.*」と言うようになったのです。大学の教員ともなればこういう *they* をサラッと使いこなせなければいけません。できないと英語が下手というよりもLGBTQへの意識が低い人と思われてしまいます。*They* 以外の人称代名詞もある

私の中級の頃は、男なら *he*、女なら *she*、複数では *they* と習いました。しかし *they* の単数用法範囲はこの十年で拡大し、米国の大学ではLGBTQへの配慮という観点から、LGBTQの学生に対しては、*he* や *she* を避けて *they* を使うよう推奨されています。例えば「その人は学生です」の意味で「*They are a student.*」と言うようになったのです。大学の教員ともなればこういう *they* をサラッと使いこなせなければいけません。できないと英語が下手というよりもLGBTQへの意識が低い人と思われてしまいます。*They* 以外の人称代名詞もある

英語が変わっても、時代の英語変化の波にすぐに乗れず困っています。

私の大学ではカミングアウトがLGBTQの人だけの義務になっていないのも不平等というところで、どんな人称代名詞を使って欲しいかを学生がコース登録のコンピュータ画面で選択できるようにし、最初のクラスでどの人称代名詞を使って欲しいかについて、教員を含めて全員で話すよう勧められています。

一月の全米言語学会でもこの十年を代表する新語の投票があり、*they* が圧倒的多数で選ばれました。全米言語学会ではチョムスキー派理論言語学の敗北も宣言されていました。実はボストンにいた頃、MITのチョムスキーの講義にも何度も行き、それでも理論が理解できず社会言語学に転向してしました。まさか自分が生きている間にこんな日が来るとは夢にも思いませんでした。在校生の皆さん、理論がわからなくても自分の頭が悪いと責めすぎないでください。あなたの頭が悪いのではなく、理論が間違っていることもあるからです。

（米国ミシガン州在住）

# 平田先生を

## 偲んで

富山大学人文学部  
教授 大工原ちなみ



平成25年度同窓会総会で講演される平田先生

平田純先生は昨年の六月三日に、ご闘病の末にご逝去されました。

先生は、昭和二十七年に東京大学文学部英文学科をご卒業後、富山県公立学校の教員を経て、昭和三十一年四月に富山大学文学部講師として赴任されました。その後三九年に助教授、四六年には教授に昇任、昭和五二年の文理学部改組により、人文学部教授になられ、平成六年三月に定年によりご退職されました。

平田先生は、三八年の長きにわたって、文学部英文学科並び

に人文学部言語文化学科で英語学をご担当されました。授業の内外を問わず学生に対して「これはどう思う」と学問的な問いを投げかけられるのですが、難しい問いであることが多く学生たちが答えに窮する場面が多々みられました。教育姿勢は厳しかったかもしれませんが、そのまなざしは温かいものであり、先生に指導を受けた多くの学生たちに慕われていました。その中からは多数の優秀な研究者や教育者が生まれており、富山県内外の大学等の高等教育機関や高校で教鞭をとっており、教育界の重鎮となっております。

先生は富山大学の管理運営面でもご活躍になり、昭和五四年から二年間富山大学評議員、昭和五九年から昭和六三年まで富山大学附属図書館長、平成三年から五年まで人文学部長をお務めになり、富山大学および人文学部の発展に多大な貢献をされました。先生は研究者としても一流であり、ご専門の英語学の分野はもちろんのこと、文学批評や翻訳、教科書等の執筆も多く、単なる英文学者の範疇には収まり切れないスケールの大きな芸文評論家でもありました。

富山大学在職中から富山県や富山市の審議員等の役職につき地域社会の文化の振興に貢献されました。ご退職後は、富山県芸術文化協会の会長として富山県の芸術文化の発展とハンガリーやチェコをはじめとする国々との国際交流の推進に寄与されました。

今でも先生の程よい長さでエスプリの利いたスピーチが聞かえてくるような気がしてなりません。ご冥福を心からお祈りいたしております。

# 楠瀬先生に 導かれ

富山大学人文学部同窓会  
会長 米原 寛



自宅でくつろがれる楠瀬先生 (平成23年頃)

富山大学部名誉教授の楠瀬勝先生は、平成三十一年四月一六

日、高岡市でご逝去されました。享年九四歳でした。楠瀬先生は、四〇歳の若さで昭和四〇年四月に京都大学人文科学研究所助手を経て富山大学文学部文学科助教授として着任され、日本史(専門は、日本中世史)を担当されました。その後昭和四九年同教授、昭和五二年人文学部教授、昭和五八年〜六二年人文学部長を歴任されました。

先生との最初の出会いは、私が四年生の時日本史特殊講義を受講した時でした。「史料を読む」ということは、単に文字面を詮索するのではなく、関連史料をも踏まえて理解することが必要「だと史料の扱いを教えて頂き、卒論諮問においては史料解釈の間違いはもとより論の展開にまで鋭く質問され、「歴史を学ぶということは、先人の生き様の真実を見極めることだ」と日本史研究の深さ難しさを改めて教えていただきました。

では、「富山県史」・「氷見市史」など自治体史の編纂事業や文化財の保存にも積極的に関われ、高い専門的視点から助言され、地域の歴史研究に大きな足跡を遺してこられました。先生はご自身の研究成果を、惜しげもなく、自治体史の編纂、寺院の史料整理、文化財保護活動などに生かすことを「歴史学徒としての本務」とされ、「学問は社会に役立ててはじめて意味がある」との言葉をおっしゃっておられました。研究活動を進められるに当たっての様々な障害・課題を乗り越えてこられた高い理念と強い信念は折々にお聞きした言葉の端々からうかがえ、また先生の「歴史に対する深い愛情」を感じました。

昭和四〇年〜平成二年の退官までの二六年に亘って、先生として多くの学生を、また学部長として人文学部を導いてこられた。偉大な知的財産を失ったことは大変残念です。今はただ、ご指導いただいたご恩に報いなければならぬとの思いで一杯です。改めて先生のご冥福をお祈りいたします。

# 第二の故郷

アンナ ドゥーリナ (22回院・人間学)



初めて富山に来た冬、「故郷のシベリアのように雪が積もるんだ」と驚いた。その時は、シベリア出身の私にとって富山が第二の故郷になるとは思ってもいなかった。それが今では富山に帰るたび、親しい友人と会えて、心が落ち着くのである。

文部科学省奨学金の留学生として、どんな大学でも選べた。なぜ東京大学や京都大学というトップの大学ではなく、富山大学に決めたのかとよく聞かれる。富山大学で過ごした四年間を顧みると、失敗も苦悩もあったが、一度も後悔したことはない。

私は現在、日本の中世思想の研究者として活動している。その原動力には、富山大学で学習した経験や知識が大きな影響を与えていると思う。

から日本の倫理思想、松崎一平先生の読解を中心に中世キリスト教岡村信孝先生(当時)から現代思想と価値判断の客観性について、多様なレベルで様々の人間観を学んできた。「人間とは何か」、「正義とは何か」、「イジメ、差別、戦争がなぜ起こるのか」、「人間にとって神とは何か」という根本的な課題をめぐって「人間学演習」で討論した。ロシア人にせよ日本人にせよ、人間として無視できない問題がある。母国と日本の文化の違いがあっても、人間としての価値観は等しく論じ合えることがわかった。違いがあるからこそ、他者だけではなく、自分という人間を理解することが出来る。

富山での学生生活は、勉強以外にも楽しめることがいっぱいあった。海や山へよく遊びに行っていた。海と山を同時に見渡せる富山が大好きになった。天気の良い日は、海の方こうに立山連峰は神秘的に浮かび上がる。立山と言え、山中に浄土と地獄が描かれる立山曼荼羅が有名である。『今昔物語』には、罪を犯した人は立山の地獄に落ちるといふ、立山地獄が影響を与えている日本人の死生観や山岳信

(京都市在住)

仰などが描かれていて、興味深く読み込んだ。このような立山曼荼羅との出会いがあつて、私は日本人の宗教意識を研究テーマに定めた。

日本人が無宗教や信仰心が希薄であると言われる。それは、どうしてだろうか、答えを探しながら、山折哲雄氏の『日本人の宗教感覚』という本を手にした。西洋の一神教的世界において、神を信じるか信じないか問題になるが、日本の多神教的世界においては、神々の気配を感じるか感じないか、神と

いう存在の捉え方が違うと山折先生が指摘する。その本に基づいて、東洋思想と西洋思想を比較しながら、欧米人から見た日本人の宗教意識についてゼミで発表した。そのゼミに出席していた友人のTさんが山折先生を知っているというので、二人で京都へ先生に会いに訪れた。その四月の三日間の京都と高野山の旅行は懐かしい思い出になった。それ以来、京都と縁を結んでもう十年程経っている。そしてこの春からはいよいよ京都大学博士課程で日本史学を学ぶ事になった。

今の自分がこのように学問の機会に恵まれ、人間としても成長できたことは、富山での学生生活が大切な役割を果たしてくれたと思っている。富山大学の先生方へも富山の友人へも感謝してもしきれない。

## 研究室から

### フランス言語文化

ヨーロッパ言語文化コース 教授 中島 淑恵

フランス言語文化専攻(かつてのフランス言語文化コース)は、一九九三年の改組で誕生した、人文学部の中では比較的新しい専攻です。二〇一七年三月に本専攻の草創期から活躍されていた村井文夫先生が定年退職され、同年四月には新進気鋭の梅澤礼先生をお迎えすることができました。私中島も、今年度末で本学に来て二二年が過ぎようとしています。教員数が少ない、ネイティブの専任教員が少ない、富山にはフランス人がほとんどいない、という点に尽くしの環境の中で、どこにも引けを取らないフランス語教育を実現し、フランスで堂々と渡り合える人材を作りたいと日々努力して参りました。



二〇一〇年からは金沢大学と協力してオルレアン研修を立ち上げ、これまでに一〇〇名近い学生を夏季短期研修に送り出しています。また、二〇一五年にはオルレアン大学との間で大学間学術交流協定を締結し、交換留学生を毎年派遣することができるようになりました。二〇一六年からは、富山

大学を実用フランス語技能検定試験の会場化し、学内外から多くの受験者を迎えています。このような環境のもと、学生たちは、質実剛健をモットーとする富山では異端ともいえるフランス大好き人間となり、美しいもの、美味しいものを愛し、議論を厭わなつたり表明したり、議論を厭わなかつたりするフランス流の民主主義を体得してくれているように思います。進路も、旅行、流通、食品業界など、何かしらフランスとつながりのある進路を選んでいる者が目立つようです。そうでなくとも教員はもとより卒業生、在学生の皆さんも、少しでもお金と時間があればフランスに出かけていますよね。本専攻は、一五〇名を超える学部生や大学院生を送り出して参りました。近年は毎年、全体で三〇名近い大所帯になっています。ホームページや専攻のグループLINEで随時連絡を取り合っています。また、近年では、年に二回のカフェ・フランセも学内外のフランス愛好者を集めて大盛況となっており、今年初めて開催した新春シンポジウムも大盛り上がりでした。公開講座やオープンクラスなども一層の充実を図っております。卒業生の皆さんも、ぜひこのような機会に古巣に遊びにいらしてはいかがでしょうか？

# キーワードは「主体性」 文化人類学研究室四〇周年シンポジウム報告

## 穴場 理 (30回文化人類学)

文化人類学研究室開設四〇周年記念公開シンポジウム「学問と実社会のつながりを考える」が昨年九月二日、教員や卒業生など六〇人余りが参加して、人文学部講義室で開かれました。前半は四人の卒業生が話題を提供しました。

私と同じ一九八二年卒・一回生の永見幸久君は、学生時代の思い出に触れた中で人類学を「和崎学？」と表現しました。人類学研究室の初代教授・故和崎洋一先生にちなんだものですが、この一言に、一線の研究者の教えにじかに触れることができた、若き私たちの昂ぶりを感じて頂けるでしょうか。



観察者の間を行くのがフィールドワークの醍醐味。畑山さんの自然体は、自身の経験を対象に、フィールドワークが続いているからかもしれません。〇一年卒業の、のしきやかさんは、芸術の世界で活躍中です。絵本作家ののしきさんは、物書きになるためには様々な人々の営みについて知らなければと、人類学を選んだと話されました。

九五年卒業の畑山浩さんは、酒蔵でのフィールドワークが縁で杜氏の道を選びました。全国に知られた蔵元で職人の世界に飛び込む決心はいかほどと思いましたが、そんな気負いなど感じさせない話しぶりでした。対象に没入したい思いと冷静

さな姿勢で企画を続けています。シンポ後半、龍谷大農学部末原達郎先生が「人類学は参与観察の時代から、参与した上で動き出す時代になった」とコメントされました。菅岡さんの今後の発信に注目したいと感じました。

話題提供が続いて、先生方からもコメントがありました。初代の助教教授・赤阪賢先生は、周囲の協力で生まれたこの研究室が学生を迎え、学会を開くことができたことと振り返る一方、おわら調査の記録をまとめ、発信することができなかったことが最大の心残りと言われました。

学会参加者の昼食券を私たちが木版刷りで作ったことがありました。予算がない中、仕方ない選択でした。SNSで個人が自由に情報発信できる現在とは、雲泥の差がありました。末原先生からは「富山大の文化人類学研究室は最高水準」との賛辞をいただきました。「自分でテーマを決める」伝統が守られ、実習や実体験を通じて学生が理論を再構築する力を身につけている、と指摘されました。

現・准教授の野澤豊一先生は「行ったことのない国や人に対するあこがれを感じられなくなってきた」と学生気質の変化に触れ、そうした中で学生の主体性を引き出すため、教員のパーソナリティは重要で、責任は重いと話されました。

シンポと討論の後は懇親会が開かれましたが、振り返るには紙幅が尽きました。若い後輩諸君の「ハカ」に触発され、一回生ほかは和崎先生直伝の「桃太郎」をこ披露した、とだけご報告しておきましょう。

(富山市在住)

### 研究室から

### 社会学

#### 社会文化コース

教授 伊藤 智樹

卒業生の皆さん、お元気ですか。社会学研究室は、一九九三年に富山大学の改組にともない、人文学部人文学科行動文化講座社会学コースとして新設されました。二〇〇六年度からは、「社会文化コース社会学教育研究分野」と呼び方を変えました。現在のスタッフは、佐藤裕教授と、私、伊藤智樹との二名です。



談にのりながら進めていきます。こうした鍛錬を通じて、学生は、それまで経験したことのない規模と構成、論理性を有した文章(卒業論文)を書くことになりました。この経験によって培われる能力は、実務や日常生活において、他の人とコミュニケーションしたり、情報を探索したり、まとめたりする際に、活かされる即戦力となるでしょう。

とはいえ、社会学として大切なのは、私たちの生きている社会がさまざまなよい部分とともに、問題や課題を抱えているということ。それらは、私たちが順調に生活を送っているときには、自分にはあまり関係がないと思われがちです。しかし、ひとたび自分や身近な人が当事者となるとき、あるいは他のきつかけで深い関心をもつとき、情報を収集して整理すること、他の人の意見や主張を理解し評価すること(それは質のよい調査に基づいた見解なのか?)、自分の考えを表現すること、こうしたことが大切になります。卒業生の皆さんが、これからの人生の中で、どのように社会学が活躍する経験をしてくれるといいな、と思っています。そして、そのような経験をしたいときは、是非我々にも知らせ、励みにさせていただきます。

社会学研究室では、学生自身が社会調査を行うことを重視してきました。一口に社会調査といっても幅広く、アンケートやフィールドワーク、インタビュー、メディア分析、ドキュメント分析などがあります。学生は、自分自身の関心に基づいて調査研究テーマを設定し、それにあつた調査方法は何か、実現可能な調査はどのようなものか、その調査によってどのような問いに答えられるか(あるいは、どのような問いに答えられるか)と思うべきでないのか、これらのことを考えるよう求められます。もちろん、簡単なことではないので、二名の教員が伴走し、相

報告

### 令和元年度 同窓会総会

日時▽令和元年七月六日(土) 会場▽ボルファートとやま

最初に新学部長の黒田廉先生からご挨拶をいただきました。



黒田廉先生

議事では平成三〇年度業務報告、事業報告、決算報告が承認されました。次いで令和元年度事業及び予算案について審議し、原案通り承認されました。

次に役員人事案の協議に入り、原案通り承認されました。新理事は山田恵美さん(45回考古)、串田勘伍さん(67回人文地理)、澤村祐矢さん(67回人文地理)、安井智哉さん(67回英米文学)です。

総会終了後の記念講演は、三月で退職された松崎一平先生の「内省的探究における超越的人格の出現について」でした。最後のローマ人、最初のスコ

ラ哲学者と称されたポエティウスと西欧の父と称えられるアウグスティヌスについてお話しいただき、県内外から駆け付けた松崎先生の教え子の皆さんをはじめ、参加者全員興味深く拝聴しました。



松崎一平先生

引き続き懇親会も開かれ、和やかに終了しました。

#### 令和元年度理事会

第一回、令和元年六月二六日

第二回、同年九月一八日

第三回、同年十二月一日

総会、人文の集い、理事会の詳細についてはホームページをご覧ください。

ホームページには役員一覧、会則、プライバシーポリシー等も掲載しています。

報告

### 第八回

## 人文の集い

日時▽令和元年一〇月二六日(土) 会場▽富山大学人文学部

#### 「住めば都

—オハイオでの二年間—

講師 大江ひとみ氏

(44回比較文学)

大江さんは夫の米国赴任に伴って配偶者同行休業制度により渡米。二人の小学生のお子さんと現地で暮らし、平成三二年四月に復職されました。様々なボランティア活動については「自分でドアをたたいた」というお言葉が印象的でした。

先生方のご協力で学生も参加

し、約四〇人が集いました。昼食懇談会では

様々な話題が出て、学年を越えて交流が深まりました。

詳細は富山大学同窓会連合会ホームページをご覧ください。

#### 富山大学同窓会連合会

令和元年七月一八日に総会、一〇月一九日にホームカミングデーが開催され、当会からも参加しました。

## 宇野隆夫先生の古稀をお祝いする会

小田木治太郎(2回院日本・東洋文化)



宇野隆夫先生

予定された時間はあつという間に過ぎ、最後は宇野先生にスピーチをしていただいた。二十数分間の短い「講義」に、一同、懐かしく聞き入った。(斑鳩町在住)



宇野隆夫先生の古稀をお祝いする会

### 年会費の報告

年会費納入状況をお知らせいたします。令和元年6月～令和2年3月まで、212名の方から212,000円の年会費を納入いただきました。また11名の方から終身会費110,000円を納入いただきました。ご支援、ご協力に厚くお礼申し上げます。

二〇二〇(令和二)年三月二  
 一日、富山駅の北側を走る富山  
 ライトレール線と、南側を走る  
 富山市内電車が接続した。これ  
 に伴い、旧ライトレール線は富  
 山地方鉄道富山港線となった。  
 六年前に本学に着任した筆者は  
 「ライトレール」という呼び方  
 しか耳にしたことがなかった  
 が、地元の方には「富山港線」  
 という呼び名は旧知のものとし  
 て懐かしく響いているのではな



「高等學校前駅」登校の様子

転変を経た路線であるが、富  
 岩鉄道の開業時から設けられて  
 いたのが高等学校前駅、今の蓮  
 町(馬場記念公園前)駅であ  
 る。富山口駅を出発して薬学専  
 門学校(薬学部の前身)を左手  
 に眺めつつ、北へ向かって三つ  
 目の駅が高等学校前駅で、運賃  
 は当初一五銭だった(葉書代が  
 一銭五厘の時代)。また少し北  
 には、東岩瀬町の犬島宗左衛門  
 氏ら有志によって造られた寄宿  
 舎もあった。南日校長によって

いだろうか。  
 同路線は、一九二四(大正一  
 三)年七月に富山口駅〜岩瀬港  
 駅間で営業を始めた富石鉄道に  
 始まる。一九三七(昭和一二)  
 年一二月に富山電気鉄道(現富  
 山地鉄)の傘下に入ったのち一  
 九四三年一月に合併、その半年  
 後には国鉄(のちJR西日本)  
 富山港線となり、二〇〇六(平  
 成一八)年四月にライトレール  
 線として開業した。

蓮町キャンパスは現在、旧制  
 富山高等学校校にまつわる像・碑  
 や南日梅林が残る公園となつて  
 いる。筆者が担当する教養科目  
 「富山大学学」(富山大学につい



三計塾と名付けられたが、一九  
 二八(昭和三)年度に廃止され  
 ている。  
 この駅はその名のとおり旧制  
 富山高等学校のそばにあり、戦  
 後は新制富山大学文理学部、い  
 わゆる蓮町キャンパスに行く学  
 生・教職員のための駅であつ  
 た。同学部は教養教育も担当し  
 ていたから、一九六二(昭和三  
 七)年に学部が五福に移転する  
 までは教育学部と薬学部の富大  
 生もここに通っていた。上の写  
 真は一九二九(昭和四)年度の  
 旧制富山高等学校卒業記念アル  
 バムのものだが、往時の活気を  
 偲ばせる。夏場にはテスト後に  
 岩瀬浜に行つて海水浴というこ  
 ともあつたようだ。

# 人文学部のあゆみ 第五回

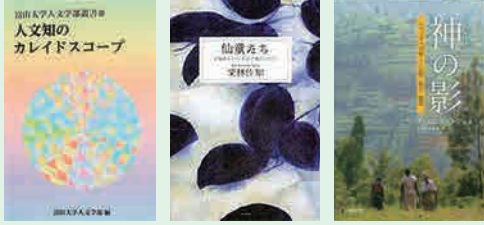
―新制大学のはじまり―  
 富山大学准教授 入江 幸 二

## 新刊案内

人文学部ゆかりの方々の新刊を紹介します。

- 『ロシア正教古儀式派の歴史と文化』(世界歴史叢書)  
 阪本秀昭、中澤敦夫(名誉教授) 編著  
 明石書店刊 2019年1月
- 『囚人と狂気 一九世紀フランスの監獄・文学・社会』  
 梅澤礼(准教授) 著 法政大学出版局刊 2019年3月  
 第36回渋沢・クローデル賞奨励賞受賞
- 『杉谷4号墳 第6次発掘調査報告書』  
 富山大学人文学部考古学研究室編刊 2019年3月
- 『森鷗外の西洋百科事典 『棕鳥通信』研究』  
 金子幸代(名誉教授) 著 鷗出版刊 2019年5月
- 『人工知能の社会学』  
 AIの時代における人間らしさを考える』  
 佐藤裕(教授) 著 ハーベスト社刊 2019年9月
- 『神(イマナー)の影  
 ルワンダへの旅―記憶・証言・物語』  
 ヴェロニク・タジヨ作、村田はるせ(50回仏文卒) 訳、  
 エディション・エフ刊 2019年10月
- 『(周縁)からの平和学 アジアを見る新たな視座』  
 佐藤幸男ほか編、竹村卓(名誉教授)ほか執筆  
 昭和堂刊 2019年10月
- 『電源防衛戦争 電力をめぐる戦後史』  
 田中聡(33回文化構造論卒) 著 亜紀書房刊 2019年10月
- 『ものがたり〈近代日本と憲法〉  
 憲法問題を「歴史」からひもとく』  
 小澤浩(元教授) [ほか] 語り部 桂書房刊 2019年10月

- 『アウグスティヌスの母 モニカ 平凡に生きた聖人』  
 G.クラーク著、松崎一平(名誉教授)ほか訳  
 教文館 2019年10月
- 『こんなにも面白い万葉集』  
 山口博(名誉教授) 著 PHP 研究所刊 2019年11月
- 『計量国語学事典』  
 計量国語学会編、中井精一(教授)ほか執筆  
 朝倉書店発売 2020年1月
- 『仙童たち 天狗さらいとその予後について』  
 栗林佐知(36回文化人類学卒) 著 未知谷刊 2020年1月
- 『どこへいったの? いちごちゃん』  
 のしざやか(49回文化人類学卒) 文・絵  
 ひさかたチャイルド刊 2020年2月
- 『人文知のカレイドスコープ  
 富山大学人文学部叢書Ⅲ』  
 富山大学人文学部編 桂書房刊 2020年3月



て学ぶ科目)では受講生とともに  
 に毎年ここを訪れており、先輩方  
 の思いが多少とも伝わればと念  
 じつつ大学の歴史を講じている。  
 【参考文献】  
 『鉄道の記憶』草卓人編、桂書房、二  
 〇〇六年。  
 『ありがとう富山港線、こんにちはボ  
 ートラム』同編集委員会編、T.C出版  
 プロジェクト、二〇〇六年。

# 令和2年度 総会のご案内

日時 令和2年7月4日(土)  
 総会 午後1時30分～  
 講演 午後2時40分～  
 懇親会 午後4時～(会費5,000円)  
 場所 ポルファートとやま

講演:「旧制富山高等学校と新制富山大学の  
 発足をめぐって」  
 講師:富山大学理事・副学長 磯部 祐子  
 富山大学人文学部准教授 入江 幸二

## 講演要旨

富山大学人文学部の前身である旧制富山高等学校は、1923(大正12)年に開学されましたが、1925(大正14)年の蓮町における校舎完成を経て、1928(昭和3)年10月に開講式が挙行されました。その時の様子は漢文で記された「富山高等學校開校記念碑」(現在人文学部棟前に移設されている)に鮮やかに描かれています。まずは、碑文を読み解きながら、開学の喜び、創設者の思い、時代の精神に思いを馳せたいと思います。(磯部)  
 1949(昭和24)年に新制富山大学が発足して70年余りとなりましたが、当初からキャンパスの集中をめぐって議論があり、それは形を変えつつ現在にも影響しているといつてよいでしょう。次いで旧制富山高等学校をはじめとした前身校のあゆみと新制富山大学発足前後の経緯を中心に、大学の歴史を振り返ってみたいと思います。(入江)

## 第九回人文の集い

講演  
 「韓国での映画のような  
 19年間のストーリー」

講師:藤本信介

(51回比較社会)

期日:十月二十四日(土)

午前10時～11時三十分

会場:富山大学人文学部一階

第一講義室

概要:交換留学生として軽い気

持ちで韓国に渡ったのが

二〇〇一年。それからず

つと韓国生活を続け、夢

にまで見た映画の仕事

続けることができる

は、誰が想像した

らう。19年間の韓国生活

と韓国映画の撮影現場は笑

わずにはいられないハッ

ピーな出来事に溢れて

ました。海外生活の楽し

さと韓国映画の現場の迫

力をお届けします。

終了後、十一時五十分より隣

接の第二講義室で昼食会を開

きます。

講演は参加費無料でどなた

も参加できます。昼食会は会費

二千元(学生五百円)です。ど

ちらか一方だけの参加も可能

## 苦しみのなかで知る人と 人とのつながりの大切さ

さて今年も頑張ろうとスタートした令和二年、なんと新型コロナウイルスという思いもけない敵が前途に立ち塞がり、世界中が不安のなかに日々を過ごしています。天の恵みと人の知恵一体でこの難局を乗り越えたいものです。

さてこうしたウイルス「不安」という噴霧立ち込める日々、相撲「ファン」ならずとも富山県民にとってなんとも嬉しい話題が、今年三月の大相撲春場所朝乃山が大関に昇進したこと。朝乃山は県立富山商業高出身であり、愛弟子の快拳を見ることなく他界した恩師の言葉を自らの相撲道の指針として励み、校訓である「愛と正義」の文字が織り取られた化粧まわしを晴れやかにまとう姿は、朝乃山の先輩・同輩・後輩そして応援を惜しまない地域の人々に対する感謝の念の現れであるかと思えます。朝乃山の大関昇進は「人と人とのつながり」から学ぶことの大切さを改めて知らしめてくれたような気がします。

ところで、世界中に猛威を振るっている新型コロナウイルスの影響は、三月二十四日に予定されていた富山大学の卒業式、及び四月八日の入学式にも及びました。卒業式は、全体の式典は中止となり各学部毎に縮小して行われました。例年行われている同窓会主催の卒業祝賀会やむを得ず中止いたしました。卒業生の皆さんの思いはいかばかりかと拝察しています。四月八日の入学式も中止となりました。

この紙面でお知らせしている令和元年度総会、第九回人文の集いも中止いたします。同封の「お知らせ」をご覧ください。

富山大学人文学部同窓会  
 会長 米原 寛

## 人文学部教員異動

- 退職(令和二年三月)
  - 熊谷隆之(日本史)
  - 竹村 卓(国際関係論)
  - 澤田 稔(東洋史)
- 同窓会事務局異動
  - 新任 村本浩子(令和二年一月)
  - 新任 富山節子(令和二年三月)
  - 退任 上田 貴広(40回日本史)
  - 退任 奥山 徹(10回国文)
  - 楠瀬 勝(名誉教授 史学)
  - 高岡 幸雄(4回史学)
  - 谷村 正寛(1回英文)
  - 田村奈緒美(38回文化構造)
  - 徳舛 時治(6回史学)
  - 平田 純(名誉教授 英文)
  - 堀田 孝昭(9回英文)
  - 馬瀬 茂(院15回地域文化)
  - 丸谷 利夫(19回史学)
  - 村田 茂(16回国文)
  - 山本 隆(9回英文)

## 一 訃 報

- 謹んでご冥福をお祈り致します。
- 上田 貴広(40回日本史) 平成31年2月5日
  - 奥山 徹(10回国文) 平成30年12月
  - 楠瀬 勝(名誉教授 史学) 平成31年4月16日
  - 高岡 幸雄(4回史学) 平成31年1月5日
  - 谷村 正寛(1回英文) 平成28年8月7日
  - 田村奈緒美(38回文化構造) 平成29年6月16日
  - 徳舛 時治(6回史学) 平成29年6月15日
  - 平田 純(名誉教授 英文) 令和元年6月30日
  - 堀田 孝昭(9回英文) 3年前ご逝去
  - 馬瀬 茂(院15回地域文化) 平成30年5月8日
  - 丸谷 利夫(19回史学) 令和元年9月11日
  - 村田 茂(16回国文) 平成31年4月24日
  - 山本 隆(9回英文) 平成30年4月28日

## 編集委員

- 田中 史子 谷口 恵子
- 成瀬裕美子 廣瀬 裕一
- 山田 恵美 山藤 登
- 山本 孝一 富山 節子
- 村本 浩子



## 文化人類学コース 卒業生のみな様へ

文化人類学研究室では、四十周年記念シンポジウムを機に、同窓会を発足し、来たる五十年を見据えて連絡網の整備をすすめています。

文化人類学コースの卒業生で、四十周年の連絡が届かなかった方は、五頁のシンポジウム報告を執筆した穴場理(八二年卒)

jinrutoyama@gmail.com

もしへは、同窓会事務局の榎垣まり(九三年卒)

hari4mapenzi@yahoo.co.jp

まで、ご一報ください。活動に際し会費は徴取せず、ご提供いただきました個人情報使用いたしません。

研究室のホームページに同窓会のコーナーを作っていたはずになつており、年一度四月ころ発行予定の「ニューズペーパー」を掲載いたします。

詳細はそちらをご覧ください。富山大学人文学部文化人類学研究室

(http://www.hmt.u-toyama.ac.jp/bunjin/index.html)

発起人、渡辺和之(九二年卒)

榎垣まり(九三年卒)